

マレーシアにおける徳教の展開と潮州人コミュニティ、 そして潮州系商人

黄 蘊

The Development of Dejiao organization in Contemporary Malaysia:
focusing on the relationship between Dejiao and the Teochiu Community,
Teochiu businessmen

HUANG Yun

This paper examines the development of Dejiao organization and the role of the Teochiu businessmen they played in contemporary Malaysia. Dejiao originated as a spirit-writing cult in 1939 in the Teochiu region of South China. Dejiao is largely a Teochiu phenomenon with a close link to Teochiu religious culture and Teochiu businessmen. By the end of World War II, Teochiu businessmen had begun spreading Dejiao to areas of Southeast Asia, such as Thailand, Singapore and Malaysia. Since then, it has continued to expand and today Dejiao has developed to big Religious organization.

The main activities and the characteristics of the various Dejiao organizations remain the same. They carry out planchette divination and charitable activities, at the same time, Dejiao organizations also act the role as Chinese mutual aid society. This paper will analyze the development of Dejiao in Malaysia, try to illustrate how the Teochiu community, as well as the Teochiu businessmen, has contributed to the development of Dejiao. It will also demonstrate the hegemony of the Teochiu businessmen inside the organization and the mechanism of the expansion of Dejiao.

キーワード：マレーシア、徳教、潮州人コミュニティ、潮州系商人

はじめに

マレーシアの華人社会には近代中国にルーツをもつ民間宗教結社ないし民間教派が多数存在するが、その中で徳教はローカルな移民社会において新たな成長の契機を得たものとして独自性をもつ。徳教は、1939年に中国の潮州地方において、扶鸞（フラン）という託宣を中心活動とする宗教結社としてスタートした。第二次世界大戦後、潮州系商人によって、マレーシアなど東南アジアの華人社会に伝播され、以来現地社会の華人住民のニーズに即応し、柔軟に活動を展開しながら、教団の拡大を遂げてきた。

今日マレーシアの13の州すべてに徳教組織が点在し、その数は200以上に達している。一方、徳教の性

格に独自の特徴がみられる。教団の活動は、扶鸞を介した神からのメッセージの獲得や慈善の展開を中心とし、宗教組織としての組織性があるが宗教的修行を含む完全なる宗教制度が確立されていない。このような徳教の性格は、地域社会に点在する廟と制度化した教派宗教の中間に位置するものといえ、その性格付けには、信者層である人々の性格が大きく関係している。

徳教の信者層のメインを占めるのは、華人商人層を始めとする一般社会層である。後述するように彼らの徳教参入の動機はさまざまであるが、大きく言うと道徳性への希求と実利的な目的という二点に集約できる。具体的には善の実践や、社会的連帯、また名誉、実利を求めるといったことがあげられる。そのうち、特に扶鸞を介する神からのメッセージの獲得は人々を引き付ける重要なポイントである。こうした信者たちの多様な思惑、もしくは希求は、徳教の教団活動の展開、組織形態の形成に大きな影響を与えてきた。

徳教は、儒教・仏教・道教・キリスト教・イスラーム教という五大宗教への信仰を掲げ、宗教的普遍主義を自らの特徴としている。一方で、儒教・仏教・道教系の神々を拝み、そのうち関帝が最高神とされている。三教に通じるところの多い「徳教心典」が1942年に扶鸞を介してもたらされ、それが徳教独自の教理とされ、徳教の基本教典とされてきた。なお、徳教の組織は徳教会と称され、各組織の名前に「閣」という文字が用いられる。

本稿は、マレーシアにおける徳教の教団展開と潮州人コミュニティ、潮州系商人との関係に注目し、徳教のこれまでの展開の道筋と教団の性格付けを明らかにすることを目的とする。東南アジアにおける徳教の伝播と展開は、潮州系商人また各地の潮州人コミュニティと大きく関係している。徳教が伝播されてきた初期では、そうした潮州人のネットワークが重要な媒介としての役割があった。

今日ではマレーシア各地の徳教会において教典を唱えるとき、潮州語を用いるところは依然多数を占めるが、広東語、福建語やマンダリンを使用する団体も少なくない。一部の地域では徳教会の会員の多くは潮州人ではなく、その他の方言集団の人からなっているからである。一方、こうした宗教儀式時の使用言語にバリエーションがみられるものの、徳教は潮州起源の宗教信仰であること、すなわち、潮州色をもっていることに変わりがない。信仰する神や儀式などの特徴、信者の多数が潮州人であることからそうした特色が見てとれるものである。

本稿では、徳教がいかにして、潮州人コミュニティと関係しながら、地域社会で定着し、またその後いかにして華人コミュニティ全体へと波及していったのかについてまず検討したい。その次、徳教会内部の信者構成、その中での権力構造を明確にした上、とくに商人層に焦点を当て、彼らの徳教参加の経緯、権力性行使の状況を明らかにしたい。本稿は上記の問題を明らかにすることで、徳教と潮州人コミュニティとの関係、また、潮州人を中心とする華人商人層の徳教への関わり方、彼らと徳教団体との相互関係を解明することをめざす¹⁾。

1) 徳教の展開について、筆者の以下の論考を参照されたい。黄蘊「マレーシアにおける徳教の教団的展開」(『宗教と社会』第13号, 2007), 75-103頁。黄蘊「徳教のトランスナショナルな拡大とネットワークの構築」(『東南アジア歴史と文化』東南アジア学会 第37号, 2008), 60-84頁。

一 徳教と潮州人コミュニティ

1.1 徳教の拡大と潮州人コミュニティ

徳教のマレーシアでの拡大及び地域社会への定着においては、潮州人同士のネットワークと潮州人コミュニティが大きな媒介としての役割を果たした。

マレーシアにおける徳教の伝播と拡大についてみる前に、まず徳教の東南アジア伝播と潮州人との関係を概観してみたい。

(1) 徳教の東南アジア伝播と潮州人の関係

徳教の東南アジア伝播には二つのルートがあった。一つは1947年に潮州地方から香港へと徳教が伝播し、そこからさらにシンガポール、マレーシアへの伝播ルートである。もう一つは1946年頃潮州からタイへの伝播ルートである。いずれももと潮州地方の徳教信者と現地社会の潮州同郷とが協力し、徳教組織の創立が実現されていったのである。ここではまず、香港での徳教創立とシンガポールへの伝播プロセスを概観し、その次、シンガポールからマレー半島への徳教伝播の状況をみてみたい。

香港への徳教伝播は、徳教創設時の長老馬貴徳によって実現された。1947年に馬貴徳は自身のビジネス展開のために香港へと渡り、その年の9月に香港滞在の潮州同郷を集め、徳教組織「紫苑閣」を創立した。当時の状況を記録した資料は以下のとおりである。

「貴徳亦于翌歲丁亥（1947年）春初，從商前往焗峰，……並與潮汕旅港諸徳友人聚縁，丁亥（1947年）季秋，貴徳與潮汕各徳友，在港之盤含道，虔設鸞座，……遂有紫苑閣之創。」²⁾

その意味は「馬貴徳は1947年の春に商売の関係上香港へと渡り、そこでもと潮州の徳教関係者たちと再会を果たした。同じ年の秋、「盤含道」において馬ともと潮州の徳教関係者たちが「紫苑閣」を創設し、扶鸞を始めた」というものである。

なお、「紫苑閣」の創設とその運営にあたっては、もと潮陽金浦郷紫梅閣閣長の鄭宛民は経済面においてサポートしていた。鄭宛民（1892-1976）はかつて潮陽同徳小学校校長、大埔県県長を歴任した人物で、日本占領期に香港へと渡り、そこで知人の紹介によって匯豊銀行で職を得た。紫苑閣とその後の香港徳教総会の設立においては、鄭は重要なサポート役としての役割を果たした³⁾。

以上のように、香港での徳教の伝播においては、潮州人のネットワークと彼ら同士の連携がカギとなったことが分かる。

その後の1952年に、徳教は香港からシンガポールへと伝わった。その過程においては各地の潮州人同士の連携と彼らのビジネス・ネットワークは同じように大きな意味をもっていた。まず、シンガポール伝播の状況についてみてみよう。

2) 李光熙編『徳教起源』（泰国徳教会紫真閣，1997年），61頁。

3) 陳景熙「徳教海外揚教與“香口力暹汕”貿易体系」（『海交史研究』2008年第1期），116頁。

徳教創設時のもう一人の長老である李懷徳は、1946年頃に潮州からシンガポールへと移住し、彼はのちにシンガポールにおける徳教伝播の中心人物となった。李懷徳は1952年に、馬貴徳の紹介で「三郊公所」というタイの潮州人商業組織への加入と、香港、シンガポール、汕頭とタイ間の貿易展開を目的に、タイを訪問した⁴⁾。タイでの貿易上の人脈の構築においては、香港の馬貴徳及び、タイへの徳教伝播の長老林修悟が大きな助けとなった。まず、馬貴徳が李懷徳を林修悟に紹介し、そこで林は、同じ徳教信者ということで、李懷徳をタイの「三郊公所」に紹介した。その後、李は徐々にタイにおける貿易ネットワークを築き始めた。

タイからシンガポールへと戻った後、李懷徳は、香港とタイの徳教団体の活動をまわりの知人に伝えた。そこでみんなが、シンガポールにおいても徳教会を創立したいとの気持ちを共有するようになった。その後、同年の10月に香港の徳教会から以下のような乩示（神からの啓示文）が送られてきた。

「星洲創閣紫新，源繼暹谷推紫辰，徳揚四海五洲去，伝香美里仰群真。」

その意味は「シンガポールで徳教会を創設し、その名前を紫新閣とする。タイの紫辰閣のように、徳教の教えを広く広めよう」ということである。

この乩示を受け、李懷徳とその周辺は、すぐさま紫新閣の創設に着手し、同年の10月15日について徳教会の創設が実現した。

このようにシンガポールへの徳教の伝播は、李懷徳のビジネス展開、また地域間の潮州人の連携が密接に関係しながら実現したものである。いわゆる潮州人とビジネス・ネットワーク、宗教信仰の三者が有機的につながり、その結果、徳教の拡大がもたらされた。

紫新閣が創設された以後、香港、タイとシンガポール間の徳教団体及び徳教関係者同士の交流はより活発化した。紫新閣の移転はその流れの中の一つの出来事であった。上述のように、紫新閣は1952年に創設されたが、その後参加者が増えたため、もとの施設は手狭になった。新しい施設への移転にあたっては、林修悟がリーダーを務めていたタイの徳教団体から経済上の支援があって、その移転が始めて実現した⁵⁾。なお、紫新閣が移転した新住所は、シンガポールの潮州系商人組織所有の建物内にあり、徳教と潮州系商人との密接な関係が窺える。

シンガポールからマレー半島部への徳教の伝播もこの時期に始まった。1954年の旧正月に香港の馬貴徳は、紫新閣の新施設移転式に出席するためシンガポールに来訪し、その機会に李懷徳と連携して、マラッカへの徳教伝播に取りかかった。

その経緯は、馬貴徳と李懷徳が同1954年に共同で寄稿した「徳教根源」に記されている。「甲午（1954年）孟春，紫新遷址之時，貴徳因参加盛典，由港赴星，協助発揚星馬徳業，…旋奉師諭，布揚叻嶼甲徳教，先創紫昌閣于馬六甲」⁶⁾。（「1954年春、私は紫新閣の移転式に出席するためシンガポールに赴き、同

4) 陳前掲書, 117頁。

5) 陳前掲書, 117-118頁。

6) 馬貴徳・李懷徳「徳教根源」(李光照編『徳教起源』1997年), 63頁。

時にシンガポールとマラヤ地域の徳教の発展に寄与することができたらと思った。その後、まもなく神からシンガポール、マラッカ、ペナンの3箇所に徳教を広めようとの指示があり、そこでまずマラッカで紫昌閣を創設した。』)

上記のようにマラッカにおける徳教会創設の直接なきっかけは依然、神からの乩示であった。1954年の旧正月4日の夜、呂祖からマラッカなどで新徳教会をつくるようとのメッセージが降された。それを受け、紫新閣の関係者は先頭となって、マラッカの潮州会館とまず接触を試みた。その結果、会館の一室を借りて、翌年の2月に紫昌閣を設立する運びとなった⁷⁾。

紫昌閣が創設されてから、マレー半島での徳教の伝播は連続したかたちで進められた。いずれも紫昌閣の創設と同じように、神意と徳教の先達たちの取り組み、及び地域社会の潮州会館といった潮州人同士の連携がキーポイントとなって、徳教組織の創設が実現されていった。

徳教伝播の功労者に対して、神からの表彰もあった。1954年6月に香港紫香閣の「正乩」（主要な扶鸞の担い手）馬貴徳と、「副乩」陳徳潮は、タイの玄德善堂で扶鸞儀礼を行った際に、神から以下の乩示が降された。

「貴生旅途勞頓，然徳教端頼生之竭誠，方有今日發迹南疆。以此一片之忠誠，以広植德基，…此功德大矣。寄望今後努力，則無量之功德。…」

その意味は「馬貴徳は徳教宣揚のため、各地を駆け回っているが、それはご苦労さんだった。しかし、貴徳のこうした献身的な取り組みがあってこそ、徳教の今日の南国の地での発展が実現した。この一方ならぬ献身は、今後の発展の基礎を築いた。それは大きな功德である。今後も引き続き、努力を続けることを期待している。氏の功德もより大きなものになろう。」である。

以上、徳教の東南アジア伝播は、各地の潮州人同士の連携、潮州系商人のビジネス・ネットワークを介して実現し、その中で扶鸞を介する神意も、重要な媒介としての役割を果たした。

（2）マレーシアにおける徳教組織の伝播

マレーシアでの徳教組織創設の具体的な状況についてみてみよう。前述のシンガポール紫新閣は、シンガポール・マラヤ地域における（1957年まで、両者は同じマラヤ連邦に属していた）初の徳教会として、それ以後の新徳教会創設に対して重要な役割と影響力をもっていた。上述のマラッカの紫昌閣もさることながら、その後成立したジョホールの紫英閣、ペナンの紫雲閣、イポーの紫明閣は、ともに1954年に紫新閣の乩示をきっかけとして、また紫新閣の徳教先達の助力を得た上でその成立が実現したものである⁸⁾。

東マレーシアへの徳教の伝播においても、紫新閣の先達の取り組みと現地潮州系商人とのネットワークが重要なカギとなった。サワク州の紫霞閣は、1961年に成立した東マレーシア初の徳教会である。

7) 温虎幹「馬六甲徳教会紫昌閣史略」（『南洋徳教総会特刊』1959年），84頁。

8) Tan Chee Ben, 1985 *The Development and Distribution of Dejiao*. The Institute of Southeast Asian Studies. P.22.

その成立に関しては、紫新閣の徳教長老陳立健が重要なつなぎ役との役割を果たした。陳立健は紫新閣のベテラン「乩手」でもあり、ある機会にサワワク州の二人の潮州系商人である友達を紫新閣の扶鸞儀礼に誘った。その儀礼のときに、扶鸞儀礼参観にきた二人に対し、神からサワワク州で徳教会を作るようとの啓示が降された。それがきっかけで、サワワク州からきた二人の潮州系商人がサワワクに戻ると、早速紫霞閣の創設に執りかかった⁹⁾。

上記のように、徳教の東南アジア伝播及びマレーシアでの拡大においては、いずれも一部の徳教中堅メンバーの先導役としての取り組みと、潮州系商人、並びに潮州人のネットワークが中心的な要素であったことが分かる。マレーシア（及びシンガポール）において徳教は、こうしたかたちでまず潮州人コミュニティの中でその拡大が遂げられていった。

1.2 潮州人の宗教結社から華人コミュニティ全体へ

徳教はマレーシアなどの東南アジア地域において、潮州人コミュニティを媒介に徐々に根を張るようになるが、その過程では潮州人以外の方言集団も多く取り込まれるようになった。今日マレーシアでは、徳教は潮州人の宗教慈善団体である、という認識をもつ人は依然少なくないが、特定の方言集団とは関係なく徳教は一般華人大衆向けの団体との見方を有する人も増えている。

こうした見方の相違は徳教のもつ多様な地域性に由来する。一部の地域では、潮州人が華人住民の大多数を占め、そこにおける徳教組織の構成員は自然と潮州人がマジョリティである。一方、潮州系住民の少ない地域では、徳教組織の構成員として福建人や広東人が多数を占めたりするケースはめずらしくない。

前者の例として、ケダー州南部や、ペラー州北部が挙げられる。ケダー州南部の大山脚は華人人口4、5万人を有する町で、華人住民の中で特に潮州系華人が多い。大山脚には、二つの徳教団体「賛化閣」、「立善閣」と、一つの善社組織「明修善社」がある。それらはいずれも潮州系華人を主要メンバーとする団体であり、宗教儀礼時に潮州語を使うなど潮州色を濃く帯びている。ペラー州北部も潮州系華人の集住している地域として、多くの徳教団体が林立している。そうした地域では、むしろ徳教と潮州人イメージとはダブる状況がある。

他方、潮州系住民の少ない地域においては状況が変わってくる。例えば、ペラー州のタイピンという町は福建系華人住民の多い町で、そこには「紫平閣」と「済徳閣」という二つの徳教会がある。この二つの徳教会のメンバーに、いずれも福建人が多数を占め、外部からみた潮州色は薄いものである。例えば、後者の「済徳閣」の27人の理事のなかで潮州人はわずか6人であり、一般参加者のなかでも潮州人は少数派にとどまっている¹⁰⁾。

こうした地域の特性と構成メンバーの比率の差によって、徳教会に関しては、潮州人と直結するものだというイメージもあれば、そうではないより普遍的なイメージもある。潮州人の団体であるというイメージは、往々にして多くの徳教団体における潮州語による経典誦頌に由来する。もっともどんな言語

9) Tan Chee Ben, 1985 P.23.

10) 2006年12月27日に済徳閣で行った聞き取り調査、また2007年3月28日に紫平閣で行った聞き取り調査に基づく。

で經典を誦頌すべきかは、かつてから徳教界内部で議論を呼ぶ問題となっている。これまで地域性などによって潮州語のほか、福建語、広東語、マンダリンがそれぞれ經典誦頌言語として使われてきた。今後も潮州語を使用し続けるべきとの意見もあれば、マンダリンへシフトすべきとの見解もある。現在この問題はまだ解決されていないが、多様性という展開方向はすでに止められない流れとなろう。

上記のように、徳教がマレーシアに伝播されてきた初期では、潮州人を中心に信者が増加していったが、その後、その他の方言集団の華人信者も取り込まれるようになった。今日では、地域によって、潮州人以外の華人が主要信者となる場合も多数みられるように、徳教はすでに広く華人社会で受け入れられるようになっている。

二 徳教会の信徒たち

2.1 徳教会における信徒の構成と入信のバリエーション

徳教会の信徒構成として、基本的に商人層からなるリーダー層、一般会員層、文書関係の仕事に携わる知識人層という三つの層が存在する。一部の小さな徳教会では知識人層が欠如もしくは極めて手薄という状況がある。それぞれの信者層は異なる社会的ポジションを有し、彼らの徳教会入信の動機、教団内での行動にもバリエーションがみられる。こうした徳教会内部の多様な信徒構成と、彼らのそれぞれの思考、行動を分析することによって、徳教会そのものの具体像と内部のダイナミズムが始めて明確になろう。

徳教会の三つの信者層に関しては、大きな団体ほどその構成がはっきりしている。ここではペナンの紫雲閣とペラー州北部の済雄閣を取り上げ、地域性と関連させながら、それぞれの信者層の特徴と入信パターンについて紹介したい。

(1) 紫雲閣

紫雲閣は都市部に位置する徳教会の典型といえる（写真1）。そのリーダー層は、典型的な商人性格を匂わせている。「閣長」、「署理閣長」、「副閣長」のいずれも会社の経営者、もしくは自営業者である。一般会員層として、会社員、ビジネスマン、主婦などがメインである。文書関係の仕事に携わる知識人層



写真1 紫雲閣の外観

は、基本的にもと華文学校の校長、先生からなっている。紫雲閣ではこの三つの層が全部そろっているが、最近では知識人層が近年の人事変動のなかで手薄になっている状況がある。

リーダー層もしくはリーダー層に近い商人たちの入信パターンとして、基本的に友達の紹介などで入会するケースが多い。そのうち、特に潮州系商人は、地域の潮州会館に加入している場合、自然と徳教会にも加入するケースが多い。例えば、現「閣務顧問」であるX氏はその一例となる。X氏は、もともとペナン州北部に位置するペリス州の潮州会館の役人であり、そちらの徳教会紫陽閣の役人をも務めていた。X氏はその後ペナンで商売を展開する中で、ペナンの潮州系商人との関係網ができ、そうしたなかで紫雲閣に加入した。1996年から1999年まで閣長を務めるようになり、紫雲閣の施設拡張などにおいて重役を担っていた。

もう一人のH氏は、同じ潮州系商人としてもともとペナンの潮州会館の理事を務める人物であり、潮州人のサークルのなかで1986年から紫雲閣にも加入するようになった。以来潮州会館と紫雲閣の両方において役職を務めるようになった。紫雲閣では1998年から総務を務めるようになり、以来紫雲閣で重役の一人としてその影響力を発揮してきた¹¹⁾。

一般会員層の入会パターンはより多様である。そのうち、潮州人社会のネットワークの関係で入会するのは伝統的なパターンとなる。その一例として、1999年に紫雲閣に入会したL氏の例があげられる。L氏は、それまでにペナンの北に位置するペリス州に住み、そこにある紫陽閣に通っていた。L氏は海南人であるが、義父が潮州人であるため、義父の影響で若いときから奥さんとともに徳教会に参入していた。1999年から家族とともにペナンに移住するようになったが、移住後ペナンにある紫雲閣に参入した。L氏は熱心な徳教信者で、紫雲閣では、初めに扶鸞儀礼の際の記録といったお手伝いをしていたが、現在では扶鸞の担い手を務めるようになった¹²⁾。

その他の一般会員の入会パターンとして、友達の紹介や、紫雲閣の気功クラスに参加するためといったきっかけがある。そのうち、一部の参加者は徳教会の雰囲気、活動に馴染めなかったため、脱退していくケースも少なくない。そうした流動的な状況の中で、残った参加者はいわゆる「縁」のある人、バイアスの合う人として、徐々に固定メンバーとなっていく。

最後に紫雲閣における知識人層の入信パターンと近年の変動について紹介しよう。紫雲閣ではこれまで知識人層といえる人が4人前後いた。そのうちの二人は1980年代以来の会員であるW夫婦である。W夫婦は友達の誘いがきっかけで紫雲閣に通うようになり、そのうちに固定信者となった。現在、W夫婦はともに大卒として紫雲閣では最高学歴者となる。1999年より紫雲閣で扶鸞が再開されてから、W夫婦は舛示の整理、解説という重役を務めるようになり、現在に至っている。もう一人の知識人層といえる人は、もと華文学校校長のC氏である。C氏は前述のもと閣長X氏のリクルートにより、1999年から紫

11) 筆者は2003年10月より紫雲閣で聞き取り調査を始めた。以来紫雲閣において、またその他の徳教団体の行事時にしばしばH氏と出会うようになる。2006年8月に筆者がイポーで開催された全マレーシア潮州会館の年次大会に出席した際も、ペナンの潮州会館の代表の一人としてH氏と会った。

12) 筆者は2003年より紫雲閣でしばしばL氏が種々のお手伝いをする光景を目にした。そのうち、文字の記録、行事時の接待以外、扶鸞の「副舛手」（扶鸞の担い手の二人の中の二番手）も務めていた。2009年以来、L氏が「正舛手」（扶鸞の主な担い手）を務めるようになった。

雲閣で文書関係の仕事に携わるようになった。扶鸞儀礼のときに「唱生」という文字を識別し、それを読み上げる役をも務めていた。

知識人層の中に、中国人のS氏も含まれている。S氏は、2003年から2008年まで紫雲閣に招かれ、乩示整理の最高責任者の任に任せられたほどの重要な知識人の一人であった。S氏中国南昌市の出身で、現在60代、定年前は大学教員を務めていた。S氏は道教修養に関する知識をもち、南昌にできた徳教会の責任者でもある。徳教会間の交流の中で、S氏はマレーシアの徳教関係者と交流をもつようになった。氏の道教関係の知識を評価し、紫雲閣の乩示の整理と関連の解説の任を託したいということで、紫雲閣の前閣長周氏は、S氏をスーパーアドバイザーとして中国から招いた。以来、S氏は紫雲閣で、乩示整理チームのリーダーとして、神の乩示を集めた本を二冊編集した。そのほか、毎週開かれる乩示勉強会のときに、主席解説者としての任を担ってきた¹³⁾。

しかし、2009年現在紫雲閣では、人事面での権力闘争、また意見の不一致などにより、上記の知識人層に関しては、人員の入れ替わりが起きている。もと華文学校校長のC氏は本来職員の一人として文書関係の仕事に携わっていたが、教団内の権力闘争に不満をもったため、一部のリーダーから除外され、結局2008年に職をやめることになった。中国からきたS氏も一部信者との意見の不一致により、2008年に職を辞する結果となった。上述のW夫婦は現閣長の側近として、その地位は不動のままである。現在S氏の代わりとして、W夫婦は乩示の整理、解説の最高責任者を務めている¹⁴⁾。

（2）済雄閣

一方、紫雲閣と異なって信者層がはっきりしていない徳教団体も少なからず存在する。都市の周辺部や村落地域に位置する徳教会はとくにそうである。ここではその一例として、ペラー州北部の十八丁という漁村地域にある済雄閣を取り上げたい。済雄閣は済系の徳教会として1956年に成立した。2007年3月に筆者が済雄閣を訪問した時、閣長のT氏から済雄閣の登録会員は400人で、よく来るのは四、五十人程度だと聞いた。十八丁という地域の全住民は7千人程度で、そのうち華人住民は5、6千人を占めている。華人住民の中で特に潮州人、福建人が多い。済雄閣はこの地域唯一の徳教会として、漁村の村民を始め、近くの華人住民の参加を集めている¹⁵⁾。

済雄閣で展開される活動は、一般の徳教団体のそれとほぼ同じである。週二回の扶鸞セアンスで会員たちに対して「問事」などのサービスを提供している。慈善福祉活動として無償の医薬品提供のほか、幼稚園をも開設している。2007年当時では200人の園児が通っていた。

済雄閣のリーダー層である閣長、総務などはみな地元漁村の出身者で、海鮮レストランの経営といった商売をやっている（写真2）。閣長のT氏は、村の出身者として済雄閣に入会してすでに長く、閣長となったのは7、8年前のことだった。閣長、総務はみな地元で威信のある人として、リーダー層に選出されているが、地元に貢献したいことで奉仕していると本人たちがいう。

13) W夫婦、C氏、S氏の事例については、筆者が2003年から2008年まで紫雲閣で行った断続的な聞き取り調査による。

14) 紫雲閣での人事変動については、2009年3月に紫雲閣で行った聞き取り調査による。

15) 2007年3月29日に済雄閣で行った聞き取り調査による。



写真2 濟雄閣の閣長（左から2人目）、総務（左から3人目）

なお、濟雄閣ではリーダー層と一般会員の社会的地位の差は、それほど鮮明ではなく、それが紫雲閣のような都会に位置する徳教会との大きな違いとなる。会員たちの入会動機は基本的に相互の助け合いと連帯を求めることにあるとみられる。濟雄閣には、文書関係の仕事に携わるいわゆる知識人がおらず、閣長と総務は、そうしたことをも兼務してやっている。当然、乚示の整理、教理の研究といったことも濟雄閣では展開されていない。このように濟雄閣においては、会員内部の階層性と権力構造がはっきりしておらず、会員の入会動機と入会パターンもほぼ均一化しているのである。

2.2 潮州系商人と徳教

徳教会では、潮州系商人は主力と言っても過言ではない。なぜなら、彼らの経済的サポートなしでは、慈善などの活動の展開が不可能だったし、徳教会の今日までの組織的拡大も実現されないものである。潮州系商人の徳教会参入の動機はさまざまであるが、大きく言うと道徳性の追求と実利的な目的という二点に集約できる。前者は善の実践と道徳性への希求という傾向性であり、後者は、社会的連帯、互助、また社会的名誉、実利などに向く方向性である。では、徳教会では具体的に潮州系商人と徳教組織とはどのような関係にあり、両者はどのように相互依存し、そこにどのような現実がみられるのだろうか。

一部の潮州系商人は、徳教会の創設と教団活動の展開において決定的な役割を果たしてきた。そうした人たちは特定の徳教会の先駆者であるとされる。ここでは『南洋徳教総会金喜特刊』を引用しながら¹⁶⁾、マラッカの紫昌閣における二人の閣長の事例を取り上げたい。

(1) Z氏

紫昌閣の教団活動の展開が軌道に乗るまで、のちに閣長と任命されたZ氏は大きな貢献をした。前述のように、紫昌閣は1954年に成立し、当分の間マラッカ潮州会館の一室を借りて、教団活動を展開していた。1955年に潮州系商人のZ氏は、紫昌閣の活動に理解を示し、紫昌閣に対して、安い賃料で教団施

16) 南洋徳教総会『南洋徳教総会金喜特刊』2006年、121-122頁。

設の場所を提供した。その後、Z氏はさらに紫昌閣に対して金銭的サポートを行い、また教団活動に参加していったなかで、正式に徳教会の信者となった。

Z氏の財力、人力のもとで、紫昌閣は1955年9月より「施棺」という、貧しい人に対する棺の贈呈との慈善活動を始めた。その翌年の1956年に、Z氏は扶鸞を介した神の任命により、第2期の閣長に就任した。その後、Z氏のリードのもとで紫昌閣では「施医贈薬」という無償の医薬サービスが展開され、慈善活動の裾野が広まった。

Z氏は同時に他の徳教会の展開に対しても力を捧げていた。氏はジョホール州の紫光閣の創設にあたる土地の購入などに尽力し、その助けのもとで1956年9月に紫光閣の教団施設建設がようやく着工できた。その後紫光閣ならびに同じジョホール州にある紫英閣という二つの徳教会の扶鸞儀礼の展開に対しても、Z氏は大きな助力を捧げた。

Z氏はこのほか、紫昌閣の「施医贈薬」という慈善活動の展開が資金難に陥ったときに、自身の購入済みの墓地を売り、その所得金の650リンギのうち500リンギを「施医贈薬」の資金に充てた。残りの150リンギを同じマラッカにある修徳善堂に寄付した。1959年にZ氏は、さらに自身所有の建物を紫昌閣に寄付し、そこを紫昌閣の永久施設にした。

Z氏はシンガポールと当時のマラヤ地域全体の徳教組織の展開に対しても重要な貢献をした。1957年にシンガポールとマラヤ地域ではすでに九つの徳教組織が創設され、その組織的統合はついに唱えられ始めた。紫昌閣の閣長であるZ氏は、その年に開かれた南洋徳教総会準備会議の座長を務め、南洋徳教総会の成立に向けてリーダーシップを発揮した。

(2) W氏

紫昌閣ではもう一人の功労者は5人目の閣長となるW氏である。W氏は1963年より閣長を13期務めた人物で、関係者から厚い信頼を得ていた。W氏は内部の活動として、1964年の年末に「施濟貧老」という年寄り、貧困者に対する物品配布の慈善イベントを開催した。それ以来、このイベントは恒例のものとなり、毎年年末に多くの関係者が恩恵を受けることとなった。W氏は外部の徳教組織に対して、教団施設建設にあたる寄付や、慈善資金の提供などを熱心に行い、その結果20近くの徳教団体から名誉閣長という名誉職の称号を受けた。

W氏は1976年になくなったが、紫昌閣の理事会は、氏の功績を称えるための石碑を建てることを、その直後に決定した。それにあたり、徳教の神仙である「道濟師尊」からも関係の銘文が降されたという。なお、扶鸞を介した神のメッセージによると、W氏は現在徳教の神仙の一人である宋大峰に導かれ、修行を続けているという。W氏は紫昌閣の扶鸞セアンスのときにメッセージをも降していたそうだ。

Z氏とW氏の事例は、それぞれ徳教会創設初期とその後におけるリーダーの活動事例となる。それらは、徳教の功労者としての潮州系商人の具体像であり、彼らのような献身的な取り組みは、徳教展開上の礎といえよう。

2.3 一般参加者

一般参加者と徳教組織との相互関係もしくはその動態には、複数のバリエーションがある。もっとも

一般参加者の入会動機として、扶鸞の魅力や神への信仰心、善への希求、もしくは人との連携を求めるためといった種々のパターンがある。そのなかで、それぞれの参加者と徳教会との関係も多様な様相をみせている。ここで、L氏一家の事例を通して、一般参加者と徳教組織との関係をみてみたい。なお、L氏一家の事例は、2003年から2008年までペナンとシンガポールで行った断続的な聞き取り調査に基づく。

前述の紫雲閣のL氏は、素朴な善意のもと、また潮州人コミュニティへの参入を目的に徳教会に参入した一例である。前述のように、L氏は海南人であるが、奥さんは潮州人である。徳教会の信者である義父の影響を受けて、結婚後一家ともに徳教会に通うようになった。L氏一家は、1999年にマレーシア北部のペリス州からペナンに移り住み、以来、ペナンの紫雲閣に加入した。L氏と筆者とのインタビューのなかで、自分の徳教参入の動機は、心の拠り所を求め、人生の指針を得ること、また社交的な場、人との連携を保つことにあると語っている。

L氏と奥さんは、ともにペナンに移住する前に、すでに徳教の神仙に弟子入りしていた。紫雲閣においても、扶鸞を介して、神仙の指示、指導のもとで行動している面が大きい。L氏をよく知る同じ紫雲閣メンバーのF氏の話では、以前L氏は人に対して不寛容な部分があったが、ここ数年間、神の指導のもと人間としての修練を行い、そのおかげでだいぶ変わったという。L氏自身も筆者との複数の対面のなかで、神の教えに対して感慨深いとの心情を吐露していた。

L氏一家は四人家族で、L氏夫婦のほか、息子さんと娘さんがいる。娘さんはすでに婚出したが、時々自身の子供をつれて、L氏夫婦と一緒に紫雲閣に行っている。息子さんはニュージーランドの大学を卒業後、シンガポールで仕事するようになった。筆者は紫雲閣またシンガポールの済雲閣などで、L氏の息子さんとはしばしば面会しており、若いインテリ層として徳教に敬虔的であるのが印象的だった。

L氏の息子のJ氏は、自身の徳教への関わりについて、小さい時から両親に徳教会の幼稚園に預けられ、また両親に連れられ徳教会に通うなど、徳教は個人の成長及び人生体験そのものと深く関わっていると語った。そのため、シンガポールに住むようになってから、すぐさまシンガポールの徳教会に参入し、諸活動に積極的に参加している。2007年7月に、J氏は徳教会の神仙の一人である「道済師尊」に、弟子として受け入れられ、「徳名」を授けられた。本人はそのことを喜ばしく受け止めていた。

L氏とその息子のJ氏は、ともに自らの人生と徳教とを密接に関係付けている。L氏親子の話では、徳教への信仰は、道徳性、人生の指針を求めることそのものであり、徳教はすでに人生の一部となっているという。L氏親子の事例は、素朴な徳教信徒の典型的な一例となる。なお、L氏は紫雲閣に通う過程のなかで、私生活における知人の圏をも築き、その知人たちとは紫雲閣以外においてもよく行き来している。いわゆる、信仰の圏から派生した社交の圏がそこにできあがり、両者がある程度重なっているのである。

三 教団内の権力構造とジェンダー

3.1 商人階層の権力性

今日マレーシアの徳教組織の中に、紫の系列、済の系列、振の系列などいくつかの系列がある。その

なかで紫の系列は徳教の元祖のモデルであり、その教団内の構造も徳教の特徴を表している。前述のように、徳教の展開とその拡大は、潮州系商人を中心とする商人層と深くかかわっており、それに応じて、商人層も教団内において権力的な存在となっている。紫の系列と済の系列、とくに都市部の大きな徳教団体においては、そうした権力構造がより明確なかたちとなっている。この節では、前述の紫雲閣を例に、徳教会の商人階層の権力性及び、近年の教団施設改築の動きについて考察を加えたい。紫雲閣に関しては、2003年から2008年までペナンで行った断続的な聞き取り調査のデータに基づく。

（1）紫雲閣における商人階層の権力性

これまで述べてきた紫雲閣のリーダー層の構成についてみてみよう。紫雲閣の理事会は43人から構成され、そのうちの名誉顧問4人と、中文書記、国文、英語書記といったポストは実権をもたない。実権を握るのは閣務顧問、正閣長、署理閣長ならびに副閣長などの30人前後である。こうしたポストにつけるのはいずれも上場企業の経営者を始めとする成功した商人である。近年の権力争いのなかで、本来閣長になる予定だったLQS氏は、対抗勢力に敗れ、名誉顧問という実権をもたないポストにしかつげなかった。もと閣長のX氏と現閣長のZ氏はこの権力闘争のなかで同じ陣営に属し、彼らが勝つ結果となった。

こうした権力の配置に応じて、署理閣長、副閣長とその以下のポストは、ほとんどX氏とZ氏に近い人によって占められるようになった。また、一般事務職員の人選に関しても、X氏とZ氏は介入を行っている。例えば、事務職のなかの主任というポストに、X氏は自分の息子の奥さんをおき、他の事務スタッフを管理、監視するとの意図があるとされている。それに対して、多くの会員、事務職員は不満をもっているが、反対することができないのは現実である。

そのほか、閣長は自らのポストを利用し、現実的な利害関係と絡んでいる状況もある。現閣長のZ氏は印刷会社を営んでいる。彼が紫雲閣のなかで実権を握るのに応じ、刊行物の印刷は全部Z氏の会社に委託するようになった。しかし、その価格が安くないことから多くの会員は疑念を抱いている。

活動展開の面においても、閣長といったリーダー層は決定的な権力をもっている。紫雲閣では1999年に新しい教団施設が完成し、その中に神の乩示の整理、学習のための「徳理研究室」というセミナー室ができ、また図書館の建設も予定されていた。教育担当理事のC氏の話では、図書館は本来会員たちが集まる場所として計画されていたが、上層部の意見では会員が「徳理研究室」だけに集まればよい、つまり、そこだけを会員集合の場とし、そうすることによって会員の管理がしやすいという。そのため、現在紫雲閣の図書館は完成したが、会員以外の人に対してもオープンな施設となり、会員たちがあまり利用していない状況になった。教育担当理事のC氏はこのことを始め、一部の上層部の独断的なやり方に対して、不満をあらわにしている。C氏は新興仏教団体の慈済を引き合いに、紫雲閣では民主的な教団の運営、管理が実現されておらず、リーダー層と一般会員間の平等関係がないということを残念げに言っていた。

以上のように、紫雲閣では実権を握る商人層は、人事、現実的な利害関係、また活動展開の面で多大な権力性をみせている。

もっとも紫雲閣では閣長などのポストは選挙によって決められている。その選挙の仕方に関しては、現実の状況に左右される部分大きい。もとマレーシア徳教聯合総会会長の陳氏の話では、マレーシア

の徳教団体のなかで8割は、その人事が会員選挙によって決められている（残りの2割は扶鸞を介する神意で決めている）。商人層は経済面で徳教の活動展開を支えているため、彼らの教団内での威信もそれに応じて高いものとなっている。こうした構造は、商人層の持続的な権力性を支えているといえる。

（2）教団施設の改築と閣長の功績

会員によって選出されたリーダー層の商人のなかで、先頭に立って、慈善など教団活動の展開に尽力する人もいるが、近年では新教団施設を建設し、それを自らの功績として残したいと考える人も少なくない。上述の紫雲閣のもと閣長のX氏はその一例となる。

もう一つの例としてジョホール州の紫濡閣をあげたい。紫濡閣は2004年にできた新しい徳教会であり、人口1万人を有する小さな町に位置する。会員は基本的に友人同士の勧誘によって入会したもので、2006年8月の時点では320人の会員が登録されている。

閣長のLIM氏は陽気で社交的なタイプの人である。LIM氏の話では、徳教の活動は慈善の性格をもつため、個人の功德の獲得に直接つながるものだという。その証拠として、自分は徳教の神仙を拝めば拝むほど自身の商売が繁盛している。LIM氏は、将来的に百万マレーシアリングを出して大きな教団施設を建てたいという願いをもっている¹⁷⁾。

このように、一部の商人層は徳教のためにお金を惜しまずに寄付しているが、それに応じて教団内のポストを狙っている。また個人の名、功績が残れるように教団施設の改築、拡大に積極的である。彼らのこうした志向性は、教団活動の方向性をかなりの程度において決めているといえる。

3.2 教団内のジェンダー関係

これまで指摘したように、徳教の展開と拡大においては、商人層は重要な役割を占めており、彼らも教団内でリーダー層に位置している。一方、こうしたリーダー役は基本的に男性から構成され、女性はほぼ排除されているのである。これは、徳教がもつ特筆すべき特徴の一つといえる。

一般的に組織性をもたない華人の廟や民間信仰の神壇においては、その理事会は基本的に地域社会の威信と社会的地位のある人から構成されている。その人たちは、往々にして金銭面で貢献することで自らの威信を固め、また社会的責任を果たそうとしている。なお、一般的に男性がいわゆる社会的権威性の象徴としてリーダーに選出されている。こうした男性中心の構造は、民間信仰の廟や神壇以外に、華人の同郷、同業団体などにも広くみられ、伝統的な華人社会の組織原理となっている。

一方、近代中国につながる新興民間教派や新興仏教団体は必ずしもその原理を踏襲していない。例えば、一貫道の教団内では女性信者もリーダー層に参入しているし、新興仏教団体の慈濟では女性は男性と同様のリーダーシップを発揮している。

しかし、徳教においては状況がちがう。リーダー層になれる人の条件として、まず財力と地域社会での威信が問われる。これは華人任意団体と同じ組織原理である。そのため、徳教は宗教団体という性格を有するものの、一般の華人任意団体と同じ権力構造をもち、極めて世俗的な傾向性をみせている。そ

17) 2006年8月21日にジョホール州の紫濡閣でLIM氏に対して行ったインタビューによる。

の印として、上述のように、都会の大きな徳教団体ほど、商人層は絶対的な権力性をもち、教団の展開方向をも決定付けているのである。

一方で、そこには女性の存在はほとんど見当たらないものである。女性は往々にして、中心的なリーダー役を担っておらず、その代わり、女性部といった重要でない役についている。上述のように紫雲閣の理事会は43人から構成されるが、そのうち、女性の理事は4名しかいない。その役職も重要ではない副教育担当、副福祉担当、女性部担当、一般理事というポストである。

こうした徳教会内部の男性中心の権力構造に対して、女性会員と信者にそれを容認する態度がみとれる。多くの女性会員の認識では、社会的影響力及び財力のある男性が徳教会のリーダーを務めるのは当然のことで、女性はその下で行動するのも不自然ではない。女性会員の教団内での行動パターンも実際に、女性部の一員として福祉、文化関係の活動に参加するとか、宗教儀礼時に脇役としてお手伝いをするなどが主である。

四 慈善、そして人間と神の応酬

4.1 扶鸞をめぐって——人間と神の応酬

徳教の創設初期から扶鸞は、教団活動の展開や、教団の求心力の維持において中心的な要素となる。今日では扶鸞を介する神意の指導とともに、人間の意志による多様な活動も展開されており、神意と人間の意志の両者がバランスよく結合されている徳教団体が多い。

では、徳教団体では扶鸞はいかなる役割を果たしてきたのか、扶鸞を介した神意はいかなるかたちで働き、それらが徳教団体の展開にいかなる影響をもたらしてきたのか。4.1では、徳教成立初期の状況から検討を行い、続く4.2では現在における商人層と神との交換関係を考察したい。

徳教の成立初期においては扶鸞の指導的作用はことさら重要だったといえる。その一例として、1944年に成立した紫雄閣の活動展開の状況があげられる。紫雄閣は馬貴徳と李懐徳の取り組みのもとで1944年3月に設立された。設立当初では活動の展開は決して容易ではなかった。以下では、徳教会の初期の活動を考察した陳（2008）と、徳教内部の資料「徳教根源」を基本資料とし¹⁸⁾、関連の考察を行いたい。

1944年の紫雄閣の「主壇」という当閣の最高神関平の生誕日の行事についてみよう。5月13日（旧暦、西暦では7月3日）は関平の生誕日にあたるが、そのための用意は5月初頭から始められた。扶鸞を介した神意は、そこで主導的な役割を担っていた。5月初頭に神仙は扶鸞を通して、朱砂、紙、筆または犬の毛、オスの鶏の血などのものを用意するよう指示した。6月25日の端午の日に行われた扶鸞儀礼では、柳春芳と楊筠松の二人の神仙が降臨し、扶鸞を介して「神鶏」という鶏をモチーフとする絵を20枚描いた。そのとき降されたメッセージとしてこのようなものがあつた。

「……以端午聖日、特由柳李両師、降絵神画、以為有関諸生珍掛之用。……為絵聖図降紫雄、集潤金

18) 陳景熙「徳教海外揚教與“香口力暹汕”貿易体系」（『海交史研究』2008年第1期）,109-110頁,115-116頁。馬貴徳・李懐徳「徳教根源」（李光照編『徳教起源』1997年）。

祝聖容、十三一会宣教本、徳留千秋永不窮。』

その意味は「端午の日に師匠の柳春芳と楊筠松は光臨し、聖なる絵を描いたが、それは関係者に掛けてもらうためだった。……師匠は絵を描くために紫雄閣に光臨したので、ぜひその絵を用いて、活動資金を集めてほしい。旧暦の13日はみんなが一堂に会する日にあたり、そのときに徳教の理念を宣教せよ。」というものである。

実際、神仙のこうした指示に従い、紫雄閣の関係者は、「神鶏」の絵を、紫雄閣をはじめとする他の徳教団体の信者に贈呈するかたちで、寄付金を集めた。そうした寄付金を用い、後日の関平という神仙の生誕儀礼が催された。

なお、その日の扶鸞儀礼では、関帝、孔子、老子の三人の聖人も降臨し、徳教が中国の原始宗教だといった教理面の教えを下すなど、扶鸞を介して各地から集まってきた諸徳教関係者に対して、宣教を行った。こうした進行具合は、事前に扶鸞で得た神のメッセージの中にすでに予告があり、ことはスムーズに進むことができた。

徳教の海外伝播と海外での募金活動においても、扶鸞を介する神意は、指導的な意味を有していた。1945年4月5日という戦争がまだ終了していなかった時期に、すでに神仙から馬貴徳と李懐徳に対し、東南アジアへ徳教を伝播させるようとの指示があった。また、「期」という1文字を降ろし、戦争の終結を予見した。

神仙の指示に従ったかたちで1946年夏、馬貴徳はまず香港に赴き、慈善活動展開のための資金集めを行った。なお、その年の夏、潮州地方では飢饉が起こった。神仙の指示に従い、馬貴徳と黄君徳という二人の徳教信徒は慈善基金募金のため、香港にわたり、資金を集めた。彼らはその資金をもって、潮州に戻り、「施粥」という無償の食事の提供を一ヶ月ほど行った。6、7千人の人がその対象者になったという。なお、災難時という当時の状況のなかで、潮州地方の有名な医者までが扶鸞を介する神意に従い、無償の医療サービスの提供にあたっていたという。

1946年秋紫垣閣で行われた扶鸞儀礼では、同じような募金に関する神仙の指示があった。そのとき、馬貴徳と李懐徳は神仙の指示に従い、扶鸞を行ったところ、竹の絵を20枚以上描いた。その後、李懐徳は神意に基づき、それらの絵を携帯し、ベトナムへ募金活動のために渡った。李はベトナムで潮州出身の同郷に対して、神仙による絵を配布するかたちで慈善募金を行った。そうした募金はのちに李によって持ち帰られ、紫垣閣の慈善活動展開の資金に充てた [馬・李 1997:61]。

上記のように、初期の徳教団体の活動展開においては、神意は重要な役割を占めた。特に戦争、災害という非常な時期においては、慈善募金の実施にあたって神意は重要な動員力となっていたことが分かる。

4.2 慈善と教団への寄付——神との交換

徳教会では一部の信者は熱心に金銭的寄付を行っているということは、これまで言及してきた。彼らの動機としては、神の庇護、自身の願いの実現を願うこと、また素朴な善意によるといったバリエーションがある。そのなかでかなり大きな金額を寄付する関係者も散見されるが、その人たちの本当の動機

は、神との交換とみることができる。すなわち、徳教会に貢献することで、神の庇護を受け、自身の望む見返りを手にすることがその目的なのである。そうした事例は徳教団体のなかで多くみられるが、ここではいくつか典型的な事例をあげ、信者と神との交換の実態をみてみたい。

（１）サバ州のLYB氏

まず、一つ目の事例としてマレーシアの徳教界の大物LYB氏を取り上げたい。L氏はサバ州で木材企業を経営する企業経営者で、地元で名の知られる人物である。L氏はこれまでマレーシア徳教連合会の会長、名誉会長といった職を歴任してきた。氏はサバ州の紫瑞閣に多数の寄付をしており、そのうち最も注目されるのは、600万マレーシアリングを寄付し、「六和塔」という六階建ての塔を建設したことである。

L氏の寄付の裏に神との交換がある。徳教関係者の話によると、LYB氏はこれまで健康状況がよくなく、氏の60歳のときに、徳教の神に12歳の寿命延長を施してもらったそうだ。その交換として、L氏も徳教の展開に尽力してきた。その後、L氏の70歳のときに、神からさらに12歳の延命がなされたという。L氏はこれまでマレーシアの徳教の展開に、人事、金銭面の両方で尽力したほか、香港でビジネスをも展開している関係で香港の徳教団体にもしばしば寄付しているという。そのうち、香港の紫青閣に120万マレーシアリングを寄付したそうである¹⁹⁾。

LYB氏は注目される大企業家として徳教会に高額の寄付をしており、本人もそれ相応の見返りを望んでいる。L氏の事例は自身の富を神と交換する典型的な例といえる。

（２）ペナン州のLQS氏

そのほか、自身の事業の成功を願って、徳教会に寄付するケースもよくみられる。その一例としてLQS氏があげられる。LQS氏は電子部品販売の経営者であり、ペナン州を中心とするマレーシア北部諸州の徳教団体間でよく知られる人物である。氏はこれまでしばしば関係の徳教団体に高額寄付をし、その豪腕ぶりが注目されている。例えば、1998年に紫雲閣の新教団施設建設にあたり、100万マレーシアリングを寄付した。LQS氏は本来高額寄付をすることによって、紫雲閣の次期閣長のポストをねらっていたが、前述のように、紫雲閣内の権力闘争に敗れたため、現在紫雲閣の名誉閣長という実権をもたないポストしか手に入れていない。

LQS氏の毎回の高額な寄付の裏に必ず何らかの動機やねらいがあるという。例えば、氏は土地売買というビジネスをも手掛けているが、大きな売買のとき、しばしば徳教の神に対して、利益が出る場合、その半分を徳教会に寄付すると願い出るそうだ。一度180万リングを儲けたことがあるそうだが、約束どおり、その半分を徳教会に寄付したそうである²⁰⁾。

19) これまでLYB氏にまつわるエピソードを徳教関係者からしばしば耳にした。そのうち、2007年3月22日に、ペナン州の紫儀閣閣長W氏からL氏の寿命延長の経緯を聞いた。

20) 2007年8月20日にペナンで行ったC氏に対するインタビューによる。

各地の徳教団体においては、素朴な善意に基づき、小額の寄付を続けている一般信者も多くみられるが、高額な寄付をする大商人は、多くの場合、何らかの見返りを求めているとみられる。徳教界長老のLSR氏によると、9割の高額寄付者は、何らかの実利的な動機のもとで寄付を行っているという²¹⁾。

一方で、徳教団体は他の民間宗教の施設に比べ、往々にして立派な建物を有し、またしばしば大掛かりな慈善活動を展開している。そうしたことを実現させているのは、紛れもなく商人層の寄付行為である。上記の企業経営者などの商人は、神との交換として高額な寄付を続けており、それらが今日の徳教の繁栄を支える不可欠な要素といえよう。

おわりに

本稿は、マレーシアにおける徳教の展開と潮州人コミュニティとの関係、また徳教内における商人層の権力性について考察したものである。徳教の東南アジア伝播、またマレーシアでの展開は、いずれも潮州人コミュニティ、また潮州系商人のネットワーク性と深い親縁性をもっている。なお、今日に至り、教団内部では商人層が教団活動の内容、教団展開の方向性を決定付けているという状況がある。

最後に本稿では商人層の慈善寄付の行為を、神との交換という視点から捉え、関連の分析を行った。高額な寄付を行っている商人の多数は、なんらかの実利的動機のもとで寄付をし、慈善の展開をサポートしている。彼らは神の庇護をねらっているのである。そうした動機のもとでの慈善寄付は、神との交換と捉えられる。

一方で、こうした交換のシステムそのものは、徳教の展開にとって必要不可欠という状況がある。なぜなら、冒頭で言及したように、徳教会では神からのメッセージの獲得、慈善や文化社会活動が主な活動となっており、徳教自身の理論基盤が弱いほか、制度化した教化システムも欠如しているのである。徳教会では信者たちをつなぎとめているのは、独自の宗教世界観よりは、神の力や実利的な要素である。その中で、商人層を中心とする信者は、神と互酬的な関係を築いた。彼らは金銭面で徳教会の活動展開をサポートする代わりに、神から庇護を受け、ねらう見返りを手にしているのである。こうした神と人間との互酬関係は、今日までの徳教の繁栄を保証してきただけでなく、それが徳教の組織運営のコードそのものでもあるのである。

素朴な善意のもとで徳教会に参入している信者もいるが、そうした道徳性への希求と、上記の実利的な互酬関係とが合わさって、徳教会の性格付けの基本をなしている。このような徳教のあり方は、商人層を中心とするマレーシアの華人大衆の生き様そのものを反映しているといえよう。すなわち、伝統的な道徳倫理、信仰心を維持しようとすると同時に、実利的な目的をも求め、両者のバランスの中を生きる生き方がそこにみえてくるのである。

21) 2007年8月21日にシンガポールで行ったLSR氏に対するインタビューによる。